洛友會報

京都大学工学部電気系教室内
洛　友　会
〒606-8501
京都市左京区吉田本町
075-753-5270
www.rakuyukai.org

変化と準備

東京支部長　伊東　康之（昭53年卒）

令和元年6月に東京支部長を拝命しました伊東です。

小森さん、下村さん、得井さんと先代支部長の間、若い世代の活性化を目標に努力をされて来ているのを見てきました。無理をした講演会企画よりも近い世代の小規模な活動を通じた活動基盤の確立という方向であると認識し、今期もその方針を引き継いだ計画を進めてきました。また、洛友会を超えた横の連携ということで、京都大学同窓会東京支部連絡会や、会員が関連するその他の活動との連携も進め、洛友会員の社会人としての素養の向上を図るべく活動を進めてきました。令和2年1月までは…

中国武漢に端を発した新型コロナウィルス感染症の流行は、とどまるところを知らず、洛友会及び同東京支部の活動にも影響が現れはじめました。私達が直接関係したイベントでも、拡大同窓会および準備を進めていただいていた見学会の中止、また、支部総会とこれに先立つ幹事会を、幹事の努力によりオンラインWEB会議での開催という新しい挑戦となりました。したがって、大役を果たしたと胸を張ってというより、よたよたとゴールにたどり着いて次期支部長になんとか襷を繋いだと感じています。

支部総会と並行して最後の使命であるこの寄稿も、多くの先輩の書かれたテーマに倣って、と思っていましたが、感染症蔓延下の社会に関して触れずにおくことはできないのではないかと考え直し、社会学的な素養が無いこと、また、リスク管理、危機管理等についても限定的な知見しか無いことは承知の上で、蛮勇を奮って書いてみました。皆さんがこの会報を手にして読まれる時点でどのような状況になっているか、まだ不確定要素も大きいですが、ご笑納ください。

まず、書き始めて、いくつもの視点があることを再認識させられます。

人命リスクと社会経済リスク、専門家と判断責任者、グローバル化した社会経済の中でのリスク想定、国際政治・地政学・情報戦、国内政治、テレビやラジオの多くのチャネル及び各番組の価値、危機時における個人の資質の暴露、治療法確立までの期間かもしれませんが日常生活とは何かという問い、等々。紙面も知識も限られているので、一つ半くらいの点について、思いついたところを述べます。

事前準備の視点

テレビ番組で若田さんが話していたので、ご存じの方もいるかもしれませんが、宇宙飛行士は遺書を書いて宇宙船に乗り込みます。ロケットの成功確率は世界最高レベルでも97～98％、すなわち、30回から50回に1回は失敗です。有人仕様のロケットには、これに加えて、アボート（中断）システムがあり、飛行士をより確実に安全に帰還させる様設計されていますが、それでも一般の人が交通事故で死亡する確率よりは桁が高い状況です。

この様に人命が係る有人宇宙開発においては、無人の宇宙開発と比較して、安全性を高めるための事前の準備がさらに重要になります。具体的な例として、「what-if」、即ち、「もし、この様なことが起こったらどうするか?」を事前に幅広く検討してリスク評価をして文書化するということがルーティンとして実施されてきました。その想定の広範さ、抜け漏れの無さが重要で、最後は残存リスクを許容するかどうかの判断になります。この様な業界・組織文化が今回の新型コロナウィルス感染防止対策にも現れたと感じています。

米国では、3／13に大統領が国家非常事態を宣言しましたが、3／15にNASA長官は、各事業所に対して各々STAGE－1～4の対応を指示しました。この時点でカリフォルニア州のAMES研究センターに対しての指示が最も高いSTAGE－3（許可された業務の従事者以外はテレワーク、施設は原則閉鎖、出張禁止、オンライン以外の会合禁止等）でした。

我国では、4／7の政府緊急事態宣言、4／8の知事要請を踏まえ、私が現在勤務している会社は、国際宇宙ステーション（ISS）の日本実験モジュール（JEM）の24時間365日運用の中核を担っているので、その管制要員の業務実施態勢確保、まず健康確保、を第一優先とした4／9から対応措置を運用開始し、現在に至っています。もちろん、JAXAの依頼と調整があってのことです。

以上は、私周辺の一部を除いて公開情報に基づく例ですが、国内外の多くの組織において、事前準備のレベルにより、対応のスピードや完成度に差が生じたものと考えられます。

テレワークについて

テレワーク、在宅勤務を経験された方も多いと思いますが、そろそろ3ヶ月になる私の実感としては、資料・データの共有サーバと通信接続が確保されていれば、オフィスでの業務遂行と在宅での業務遂行に大差は無く、通勤時間の分も必要に応じて業務ができてしまう分、総合的なアウトプットは増えるというものです。また、WEB会議と会議室集合での会議

の差についても大差は無く、事前準備のレベルによっては結果は簡単に逆転する、という意見です。今まで如何に無駄なことをしていたか、という実感もあり、今後、様々な組織で業務の進め方に大きな影響があると思われます。テレビ番組で著名な経営者からも同様の発言がいくつかありました。

「あかん人が見えてきた」

危機時の言動がその人の本質、ごまかしてきた能力などを表してしまうことは言われてきたことです。鶴瓶師匠のご意見の内容は把握していませんので、私が感じたことと同じかどうかは別問題ですが、師匠のこの言葉は印象に残りました。専門家と言われる方々のコメントも、ご意見番と言われるタレントほどではなくとも、玉石混交であることが明らかになりました。また、これらをテレビでネットで、毎日繰り返し聞かされることで、無駄な情報がここまで溢れているのかという実感、また、これで良く成り立っているなという不思議さを感じた次第です。

随分前から、変化の時代、変化の速度の加速等言われてきていますが、今回のパンデミックにより、変化の方向が変化すると感じられます。より良い情報を摂取し、自分で考え、社会に貢献していきたいものです。

最後までお付き合いいただきありがとうございました。

会員寄稿

昭和の京都は遠くなりにけり

伊藤　篤
（平元年卒・東北支部）

洛友会本部総会開催が見送りとなるなど、新型コロナ感染拡大の最中にこの原稿を書いています。掲載される頃には何とか終息の見通しが立っているといいのですが。

さて、東北支部は相変わらず会員数が少ない状況です。稀に新規会員の方が増えたとしても、たまたま転勤先が東北だったというだけで、数年後には、また転勤で転出されてしまいます。京都との物理的、時間的な距離を考慮すれば仕方のないことですが、何とも寂しい状況です。加えて、電気を勉強した学生が活躍できる場が、比較的少ないことも影響しているかもしれません。

そんな東北支部において、何を隠そう私は30年以上も在籍するベテラン会員でありますが、未だに下っ端会員でもあります。元禄時代から先祖代々、一族郎党、農家の血筋として仙台市で生活している正真正銘、生粋の宮城県人です。もうちょっと東北支部内で大事にされてもいいと思うのですが。（冗談です）

そんな私がなぜ京都で学生時代を過ごしたか、半分忘れかけていましたが、巣篭りの最中にちょっと振り返ってみました。

40年前、仙台市内の高校の修学旅行の行き先と言えば、京都、奈良方面と決まっていました。当時は東北新幹線が開業して間もない頃で、終着駅はまだ大宮でしたが、東海道新幹線に乗り継いで、大幅に時間短縮が図られた時期だと思います。私も当然、修学旅行は京都、奈良に行くものと思っていました。

ところが、先生方は何を思ったか、修学旅行は時代に合わないとか、勉学として成立しないとか理屈を言い出して廃止の方針を出してきました。しかし、急には廃止できないので、移行措置として全生徒一律の行き先とはせずに、複数の目的地を設定して、生徒を分けて行かせようということになりました。

設定されたコースは四種類。京都、奈良、北海道、伊豆大島。当然、京都、奈良に人気が集中して定員オーバー。抽選となりました。私は京都にエントリーしましたが、とにかく、くじ運が悪いので外れてしまいました。要領のいい連中は、京都、奈良を避けて北海道を選択しており、ちょうどいい人数で埋まってあっさりと行き先決定。京都が外れた私の行き先は不人気の伊豆大島と相成りました。このコースを設定したのは地学の先生でしたが、当時は本当に恨みました。テーマは火山岩の観察だとか。10代の若者には退屈なテーマです。しかも、修学旅行の時期をよく考えてほしかった。９月といえば台風シーズン。私たち伊豆大島組は、絶対に台風で島へ渡れないだろうと絶望していました。

さて、旅行当日ですが東京まで出たところで台風に見事命中。代替案など考えているはずもなく、品川のホテルを急遽確保して急ごしらえの夕食と、なぜか浅草のガラガラの寄席に放り込まれただけの修学旅行となりました。寄席の演者達は20人ほどの高校生が会場入りしているのを見て驚いたらしく、「今日はお客さんがよく入ってるな～」と本気で感心していたようです。たしかに、我々の他は４名ほどの客でした。

こんな修学旅行のどこが勉学でしょうか？先生方も変な見栄を張って余計なことを企てずに、従来通り、素直に一律、京都、奈良にしておけばよかったのですよ。そうすれば、ホテルの宴会場で先生方も生徒ほったらかしで酒盛りできたでしょうに。ちなみに、この失敗を踏まえたかどうかは知りませんが、翌年からは京都、奈良だけに戻していました。大学一年生の時、高校三年生の時の担任だった先生から、修学旅行の引率で京都駅前のホテルに来ていると連絡をいただき会いに行って知ったのです。ひどいじゃないですか。伊豆大島組の生徒たちは本当に恨んでいると思います。

そんな事情があり、修学旅行で行き損ねた京都でどうしても暮らしてみたいと思い、親に内緒で京大を受験しました。当時は、国立大の授業料が毎年のように倍々ゲームで値上がりしていましたし、東北の人間が縁もゆかりもない遠く離れた土地にわざわざ出向

かなくてもということで、両親には心配やら経済的な負担やら迷惑をかけたと思います。それでも、学生時代に京都の街を隈なく巡ることが出来ましたし、知りたいと思っていたことはだいたい理解することができました。

さて、大学卒業後はすぐに仙台に戻って働き始め、社会人一年目には結婚してしまいました。当時はバブル景気絶頂にも関わらず、たまたま妻も京都、奈良好きだったので新婚旅行先は海外ではなく、京都、奈良にしました。ついでに研究室に二人でご挨拶に伺い、先輩に車で夜の伏見稲荷神社に連れて頂いたりしました。それからも、二人でちょくちょく京都に観光に訪れていました。子どもを連れて雪の金閣を見に行ったこともあります。たまには京都以外の土地にも行ってみようという話になることもあったのですが、結局は京都に落ち着くということが何度もありました。家族にとって京都は何度でも行きたい、そんな最優先の土地だったのです。

しかし、最近は次第に京都から足が遠のいていました。飽きてしまったというわけではなく、何となく我々が好きだった京都とは変わってしまったように思えてきたのです。一体どういうことでしょう。学生時代にお世話になった銭湯が廃業してしまったからか。銀閣寺キャンディーが廃業したからか。京都駅舎が巨大になりすぎたためか。商売替えした祇園のお茶屋さんが増えたためか。はっきり申し上げてインバウンド政策の影響だと思います。

もちろん、京都は有数の観光地なので、私が学生だった30年以上前も観光客で賑やかでしたが、京都市民が生活に難儀するほど無秩序ではなかったように思います。観光客の中心はあくまで国内、それも地方から訪れる方々が中心でした。ところが今は、読めない外国語の表示が目立ち、何だか街中が安っぽくなった印象です。町家のオーナーも外国人に取って代わられているようです。これでは、古くからの京都ファンは離れてしまうでしょう。少なくとも、私にとって、東北からわざわざ目指す土地ではなくなってしまいました。大変残念ですが仕方ありません。50代になって京都を卒業しました。ただ、鞍馬の火祭りは、もう一度だけ見たいものです。

京都を卒業した現在は、年齢を重ねたこともあり、観光客が寄り付かないような、東北の湯治場巡りに精を出しております。温泉の効果は絶大です。肌がとても滑らかになりますね。

あれ？ここまで筆を進めてきて、以前も同じような内容の投稿をしたような気がしてきました。まあ、同じ話を何度も繰り返すのは年を取った証拠ですのでご容赦ください。

兼業農家

興村　昌樹
（平24年卒・関西支部）

私は昭和62年に農家の長男として生まれました。農家といっても兼業所得の方が農業所得よりも多い第2種兼業農家になります。この第2種兼業農家は平成31年の統計で全国58万戸、総農家の約3割になりますが、全国の総世帯数からすると1％未満のようです。そんな我が家の一年を紹介したいと思います。

1．春（4～6月）

冬を越して暖かくなる頃、田んぼを耕し始めます。耕運機があるので、手作業の時代から考えると楽ですが、我が家の田んぼは飛び地になっており、その間の移動に意外と時間がかかります。

春は繁忙期で米つくり以外に竹林で淡竹という種類の筍を収穫し、市場へ出荷しています。天候にもよりますが、早朝から始めて①収穫②根元を切って平らにする③箱詰め④計量という工程を市場が閉まるまで正午までに200～500kgほど収穫できます。

ゴールデンウィークに苗代をつくります。我が家では育苗箱に①新聞紙を敷く②床土を入れる（床土入）③床土をならす（ならし）④押し固める（鎮圧）⑤種もみをまく（播種）⑥水をまく（潅水）⑦燻炭をかぶせる（覆土）⑧再度水をまくという8工程で作っています。これらの工程を播種機という機械で行う農家もありますが、苗の数が少ないのですべて手作業でやっています。次の日に苗代田に並べていきます。これも手作業で、水を含んだ育苗箱は重く、田んぼの中の移動は、泥に足を取られて、移動距離は少ないですが、重労働です。育苗箱を並べて、ビニールシートのトンネルで覆い、約1か月後、苗が出来上がります。

苗を育てている間にあぜ（田んぼの周り）の草刈りと代かき（田んぼに水を入れて土をかき混ぜて平らにする）をします。

6月に入ると田植えが始まります。田植機で植えますが、苗をまっすぐ植えることは意外と難しく、私はまだ慣れないので。隙間だらけになります。隙間ができると手植えする手間が増えて家族から顰蹙を買います。

2．夏（7～9月）

田植えが終わると梅雨に入ります。この時期から田んぼの水の調整が必要になります。稲が生育するにためには、1反当たり1000～1400キロリットルになるそうで、小学校の25mプールで3～4個分の量になります。雨が少なすぎると稲が育ちませんが、雨が多すぎても水を抜かなければ稲が沈んで育ちません。そのため、雨が多いと水の調整が多くなります。

また、夏場は主に月1回程度のペースであぜの草刈りをします。春の草刈りに比べて地面からの気化熱で蒸し暑く、同じ場所でも時間が長く感じます。

3．秋（10～12月）

夏が終わり、稲が色付き始め、出穂すると稲刈りの計画を立てます。稲刈りの1週間ほど前に田んぼの水を抜きます。稲刈りは稲が乾燥していないとコンバインでの刈り取りの時に稲がつまって上手くいきません。そのため、稲刈り当日だけでなく晴れが数日続くことが望ましいので、天気予報を見て計画を立てますが、晴れを待っ

て、水を抜く時期が遅くなりすぎるとお米の質が悪くなるため、毎年稲刈り直前は家族でもめます。

稲刈り当日、ほとんどコンバインで刈り取りますが、田んぼの入り口と、コンバインで刈り取りできない端は手で刈り取りします。私が学生の時は刈り取ったもみでいっぱいになった袋を軽トラックにひたすら積んでいました。もみの袋の運搬は重いよりも、肌がかゆくなることが一番記憶に残っています。今ではその作業もコンテナに流し込むだけで済むようになり、かなり人手がかからなくなりました。

刈り取ったもみは乾燥させて脱穀します。我が家にも昔ブレーカーを頻繁に飛ばす乾燥機がありましたが、故障したため今はもうありませんので、近所の有料で使うことができる乾燥機と脱穀機を使っています。脱穀が終わればやっと流通している玄米になります。

この時期は古米（1年前に収穫した米）がまだ残っているので、新米の誘惑と戦うことになります。新米は水分量が多く、非常においしいのですが、先に古米を食べないとそのまま廃棄になってしまいもったいないのです。

4．冬（1～3月）

収穫が終わると竹林の枯れ竹の伐採と処分くらいであとは農閑期になります。我が家では毎年正月用の餅を年末につくっています。秋に収穫したもち米を釜で蒸した後、臼と杵でもちをつきます。数年前までは餅つきは機械でやっていましたが、この令和の時代になぜか臼と杵に戻っています。臼と杵でついた餅の方がおいしいといいますが、素人がついているせいか正直あまり違いはわかりません。

細かい作業は省略していますが、毎年この流れで季節を過ごしています。地方によっては1か月ほど前後するようです。

大学入試の頃、父と進学についてもめました。父は就職か進学するなら農学部といっておりましたが、私は興味のあった電気電子工学を学びたいと意見がわかれました。最終的には説得して電気電子工学科に入学することができました。就職も運よく電気系の業務で地元の関西に残ることができ、非常にありがたく思います。振り返ってみると進学、就職といった人生の岐路でいつも兼業農家になるにはと考えていたような気がします。

本稿が掲載されるころには終わっている頃かと思いますが、この週末には田植えに勤しみたいと思います。

支部だより

関西支部総会報告

令和2年度の関西支部総会は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う緊急事態宣言発出のため会場での開催を見送り、書面開催といたしました。令和元年度行事報告および決算報告、令和2年度行事計画および予算編成、令和2年度関西支部役員改選の各議案について審議され、承認・決議されました。令和2年度の新役員は、

支部長　則竹 博安（S56年卒）
副支部長 福田　隆（S57年卒）
総務幹事 市橋 国之（H3年卒）
会計幹事 伊藤　薫（H21年卒）

の各氏です。

西　順也（H6年卒）記

北陸支部総会報告

全国的な新型コロナウイルス感染症拡大の影響を考慮し、令和2年度の北陸支部総会は書面による開催と致しました。支部幹事より会員の皆さまに、会計報告に関する議案、支部役員改選に関する議案を送付し、はがきまたは電子メールによる意思表示をお願い致しました。結果は、両議案に対して多くのご賛同を頂き、原案のとおり承認されました。ご多用の中、返信頂いた会員の皆さまに改めて感謝申し上げます。

次回の北陸支部総会は、例年どおり来年6月ごろに、福井市内での開催を計画致します。日程等詳細については、支部幹事より改めてご案内致しますので、多くの会員の皆さまのご参加をお願い申し上げます。

朝倉　茂（平12年卒）記

改選された支部役員

顧　問　西村 尚和（昭23）
　　中島 恭一（昭40）
　　松木 純也（昭44）
　　（新）葛原 正明（昭54）
支部長（新）笠原 禎也（平元）
副支部長　久和　進（昭47）
　　金森 閲治（昭40）
評議員　柴田　明（昭40院）
　　西念　勉（昭46）
幹　事　中田 和男（昭63）
　　石丸 哲也（平元）
　　朝倉　茂（平12）

訃報

昭23　藤原　雅一
昭23　浅尾　力　2・5・2
昭25　森岡　昌之　2・3
昭25　松山　敏夫　1
昭28　中川　正憲　2・3・21
昭28　大野　正久　26・1
昭28　朝比奈　隆　1・11・6
昭31　永野　勇　2・1・22
昭32　小山　徹　2・4・12
昭32　中村　修三　1・6
昭34　三輪　修　1・9・22
昭35　竹原　凞　1・7・12
昭35　北村　哲男　1・6・23
昭36　三森　定道　2・1・27
昭42　黒島　浩　2・2・3
昭45　伊藤　雅之　2・1・8

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。